



「地域間連携」

滋賀銀行 副頭取 高橋 祥二郎

「地方創生」に向けた取り組みが本格化しています。滋賀県や各市町では「地方版総合戦略」策定のなかで地域資源の発掘と観光化を模索されていますが、その成功の鍵は、歴史遺産の再評価と各地域をつなぐ「地域間連携」にあると考えます。

滋賀県には琵琶湖をはじめ、国宝彦根城など他府県にはない多種多様な地域資源があります。近江の国といえば、映画や大河ドラマではたびたび戦国時代の表舞台として描かれますが、大津京や壬申の乱など各時代を通した名所旧跡も各地に点在しています。

例えば、聖徳太子ゆかりの霊場。諸説ありますが、全国にある36霊場のうち、大津市の西教寺、東近江市の瓦屋寺、百済寺、石馬寺や近江八幡市の長命寺など県内5霊場に加えて、近江八幡市の観音正寺や教林坊など太子ゆかりの寺院が多くあります。

いずれも紅葉の名所で、千手観音などの寺宝が安置され、古を蘇らせる景観が訪れる人の心を癒してくれます。

「地方創生」には、その地域ならではの“創生モデル”の構築と果敢な実行が求められています。「総合戦略」策定に各地域が切磋琢磨することは大切ですが、聖徳太子制定の『十七条憲法』にある「和を以て貴しとなす」の言葉のごとく、各地域にある霊場や史跡、城跡を巡る観光ルートの開拓など、地域を越えた連携も重要な視点です。また、“見どころ”の広域化は宿泊客の増加や文化的・歴史的遺産を確かな形で将来に引き継ぐことにつながるものと確信します。

歴史遺産の再評価と各地域をつなぐ「地域間連携」により、滋賀県を「湖の国」「城の国」「太子ゆかりの国」などとして全国に発信することで地域社会の活性化につながれば、と思う次第です。

県内データ あれこれ

消費者物価指数(大津市)

物価指数、23カ月連続で上昇

「食料」の影響大きく

滋賀県が発表した大津市の4月の「消費者物価指数(総合)」(CPI、2010年=100)は、103.4、前年同月比+1.3%と23カ月連続でプラスとなった。

グラフは、CPIの前年同月比の上昇や下落がどのような費目の変化によるものか(寄与度)をみたものだ。昨年4月以降、「食料」や「光熱・水道」「交通・通信」「教養娯楽」の割合が大きくなっている。消費増税に加えて、エネルギー価格の上昇や円安による輸入価格の上昇などの影響が考えられる。

ただ、この4月のCPIは前年同月比+1.3%と、増税前の水準に戻った。自動車等関係費と教養娯楽用耐久財が下落したことなどが要因の一つであり、寄与度でもCPIが同+1.3%上昇したうち「交通・通信」が-0.21%分「寄与」するなど、昨年3月以来13カ月ぶりにマイナスとなる費目が現れた。一方で「食料」の寄与度は1.18%と依然として影響は大きい。具体的には、肉類、外食、生鮮野菜、菓子類、調理食品での上昇が目立つ。

食料品の値上げは家計への負担も大きい。個人消費全体にどのような影響を及ぼすのか、今後も注目したい。

(株)しがぎん経済文化センター 長山 真由美

大津市の消費者物価指数 総合(CPI)と主な費目の寄与度(前年同月比)

